



女たちの乱気流

桐生裕子

女たちの乱気流



桐生裕子

長編恋愛小説 女たちの乱気流

平成4年1月20日 初版第1刷発行

著 者 きり ゆう ゆう こ  
桐 生 裕 子

発 行 者 伊 賀 弘 三 良

発 行 所 しょう でん しゃ  
祥 伝 社

東京都千代田区神田神保町 3-6-5

九段尚学ビル 〒101

☎ 03 (3265) 2081 (営業)

☎ 03 (3265) 2080 (編集)

印 刷 堀 内 印 刷

製 本 関 川 製 本

万一、落丁・乱丁がありました節は、お取りかえします。

Printed in Japan. © 1992, Yūko Kiryū

ISBN4-396-63038-7 C0093

# 女たちの乱気流



# 目次

プロローグ 7

1章 不吉な予告 9

2章 赤いフラッグ 39

3章 的中した予告 83

4章 愛の死角 101

5章 迷路のゆくえ

127

6章 疑惑の芽

157

7章 春の旋風

184

8章 上昇気流

210

9章 飛翔<sup>ひしょう</sup>

245

あとがき

269

装幀・中原達治

## プロローグ

二人で選んだこの部屋を、私は出ていきます。

あなたを愛しています。でも、あなたの家庭をこわす気は毛頭ありません。私がこわせるほどもろい城だとも思っていないません。

愛が強ければ強いほど、“形”を求めるものだけれど、形のない愛、それが私たちの愛の形なのだ、と自分に言い聞かせてきました。

あなたが私に求めたものは、“白紙”になれる女、ということでした。女優として、私はいつも白紙になり、新たな役にふさわしい人物を演じます。しかし、“愛”の前では、それは不可能でした。

年ごとに自分らしい色彩を、自分の人生に塗り重ねていきたいという私の中の生命力が、あなたとの別れを決意させたのです。

さようなら。

タンスもベッドも、何もなくなった部屋で、この手紙を読んで戸惑っているあなたの顔が、目に浮かびます。

さようなら。よいお仕事してください。

七月十五日

葉山啓一様

彩木  
操

## 1章 不吉な予告

成田なりた空港の誘導灯は宝石をちりばめたように美しかった。女優さいきみさおの彩木操は赤、青、緑……ひとつひとつの光を見つめ、目を細めた。アタッシェケースを握り直す。背筋を伸ばし、深呼吸をする。搭乗券をグランドホステスに渡して25番ゲート搭乗口に向かう。機内までの通路に響くハイヒールの音に、思わず後ろを振り返りたい衝動にかられた。たとえ後ろを振り返っても、自分を見送る人は誰もいるはずがない。それなのに「後ろを振り返ってはいけない」と無意識のうちに自分に言っかけて聞かせている。

「なんだかギクシャクしていて、まるで首の壊れた人形みたい」

そうつぶやくと、そんな自分が急におかしくなつて、思わず笑ってしまった。

「やけにご機嫌ですね。まさか飛行機に乗るのが嬉しいという年でもあるまいし」

マネージャーの吉野よしのが話しかけてきたが、操はそれには答えなかった。

操の今回のスペイン行きには周りの誰も反対した。

操が所属するプロダクションは、コンセプトがあまり練れていないリポート番組に、他のスケジュールを動かして調整してまで操を送り出すことに難色を示した。

「あなた、いま普通の精神状態じゃないから……」

すっかり主婦の座に落ち着いている友人の葛西登美子が電話先で心配した。そして登美子と同様、操と演技アカデミーで共に学んだシナリオライターの大木未令も忠告した。

「この旅はやめたほうがいいわよ」

未令が、人は人間を超える何か大きな力によって動かされている、と言って西洋占星術や東洋気学を本格的に勉強するようになって五年になる。

「人はね、どうしても自分の星のある方向に向かいたくなってしまうものなの。でもそれはけっしてよい方位とはいえないのよ。スペインは日本からは北西、今まさしくあなたの星があるところ。操は自分の星にぶつかっていくことになるのよ」

プロとして鑑定もする未令からのアドバイスを、最近では何よりも頼りにしている操だが、今回はそれをも無視する形になった。

「だって、二年ぶりに真希に会えるんですもの。たまにはアカデミー時代の四方山話でもしてきてあげなければ。真希って、電話では強気なこと言ってたけど、結構さみしいんだと思うの」

スペインのバルセロナには、オリンピックに向けての取材のため長期滞在しているキャスターの植村真希<sup>うえむら</sup>がいる。操は鼻がピクンと上を向いた真希の愛嬌のある横顔をなつかしく思い出し、タロットカードを前に眉<sup>まゆ</sup>をひそめる未令に明るく言い放った。

彩木操、植村真希、大木未令、葛西登美子は八年前の春、十期生として演技アカデミーに入学した。

「今からあなたがたの自分を知る旅が始まるのです。芝居よし、パントマイム、タップダンスまたよし。それにクラシックバレエ、声楽、とにかく何でもやってみて、どんなに自分が素晴らしいか、どんなに自分が醜<sup>みにく</sup>いかを知ることです。さあ、旅の始まりです。目を輝かせなさい！」

入学式の日、大きな体をゆさゆさ揺らしながらスタジオで熱弁<sup>ふる</sup>を奮った学長の桃井春子<sup>ももい はるこ</sup>の前で、緊張している他のどの新入生より早く大きな笑い声をあげてしまったのが操たち四人だった。春子女史の大きなメガネが朝日を浴びてキラッと光った瞬間、鼻からズリ落ちたのがおかしかったのだ。

「ホラ！ その四人。反応がよくてヨロシイ！ その四人から自己紹介始め！」

あの時、春子女史の指名で自分について語った生き生きした皆の表情と笑い声を、操は今でもよく思い出す。

入学式の日以来今まで、四人は絶えず音信を取り合ってきた。そして卒業後それぞれの道に進んで五年、私たちにとってこれからの自分を知る旅になるのかもしれないと操は思う。久しぶりに真希に会いたい。地平線まで果てしなく広がるひまわり畑を見たい。そして今どうしてもあの人……葉山啓一はやまけいいちから離れて季節も時間も違ふところへ行きたい、という気持ちを操は抑えようがなく、スペインに向かうのだった。

ジェット機は空港を見回すように一回りし、次第に速度を速め一瞬大地を蹴った。操はこの瞬間が好きだ。何かに決意を固め、全身全霊をかけて空に向かう生き物のよう。シートベルトを締め、座席にゆっくりもたれると、その底知れぬエネルギーが背中を通して伝わってくる。次第に高度を上げていく機体の中で、操は葉山啓一に確かに別離を告げようとしている自分を感じていた。操にとって葉山との三年は、すべてをかけた歳月だった。凄まじい苦悩にのたうちまわった三年間だった。あれが恋というものなのだろうか。

『週刊トーク』の編集長である葉山啓一に出会って以来、操の人生は変わった。すべての価値観を葉山に委ねた月日が流れた。そして今——。もう一度自分を変えようとする操がここにおいて、あの日から何も変わっていない葉山が東京にいる。操はまとめていた長い髪をほどき、その茶色味がかった柔らかなウェーブに手櫛を通すと、座席を倒し静かに顔を閉じた。コックピットからパイロットの渋い声が流れた。順調な飛行を告げるアナウンスだった。

彩木操が葉山啓一に初めて会ったのは、操が女優として仕事を始めて三年目、初めての舞台に取り組んでいる頃だった。演技アカデミー在学中にスカウトされテレビの人気ドラマに出演して以来、女優として順調に歩んできたが、舞台を目指して何カ月も稽古を続けるという毎日は、けっこう大変なものではなかった。舞台の世界は厳しい。下積みの劇団員がたくさんいる中、知名度があるというだけで突然主演女優という立場で入っていくことになったのである。かなりのプレッシャーがある。軽い冗談が飛び交い、アシスタントディレクターが少しの待ち時間にも気を使って連絡を入れてくれるテレビドラマの楽屋と、舞台の稽古場とは、まったく空気が違う。自分よりはるかに実力も才能もキャリアもある団員が食い入るようにつめる中、操は初歩的な注意を受けながら演じなければならぬ。存在感がない、訴える力がない、気持ちが入っていない、と演出家からは怒声を浴びせかけられる。肉体的にも精神的にもかなりまいっていた時の取材だった。

「あなたは限りなく白紙になれる人だ。それがいいんだ。美しい絵は白紙の上にしかなかない。あなたには美しい何かを生み出す力がある。それは、ただ単に美しい人だということより、もっともっと意味があることなんだと私は思う。私のように、原色だらけのマスコミ社会でボロボロになって働いてきた中年男には、たとえばもうそれの魅力だ」

あの日、葉山は臆面もなく最高の殺し文句を女優彩木操のインタビューにぶつけてき

た。褒め言葉には職業柄慣れていた操だが、あの日の葉山の言葉には魅かれる何かがあった。

インタビュ―は稽古場の裏の寂れたコーヒーショップで行なわれた。初日を二週間後に控え、たとえ舞台の宣伝になる取材といっても、長時間稽古場を離れることはできず、操が近場の店を指定したのだ。店は小さくて古いが、窓はやたらに大きい。老マスターが黙々と挽くコーヒーの香りがとてもいい。他の若い劇団員が、大通りに面して新しくできた喫茶店に好んで行くのをいいことに、操は稽古の合間によく一人で足を運んだ。

葉山は操のいつも座る窓際の奥の席で待っていた。

「稽古中に隅の方でのぞかせていただいていたんです。失礼かと思いながら、稽古に向かっている彩木さんの様子を拝見したくて」

「ずいぶん長いこと見ていらしたの、わかってました。何か面白いことでもありましたか」

操はコーヒーのスプーンをもてあそびながら、表情を変えず無愛想に言った。

多くの芸能人の例にもれず、彩木操もいくつかの苦い経験から、マスコミの取材という警戒心を前面に出した態度をとるようになっていた。ドラマに出て急に脚光を浴び始めた頃、休憩時間、移動時間はすべてインタビュ―を受ける時間に変わった。自分のような小娘のために、記者という立派な肩書きを持つ人たちが長時間を割り、わざわざ足を運ん